

と満足感を与えることにもなります。また、ついでに、体中にくまなく手をすべらせて、腫瘍やしこり、皮膚の変化をチェックする良い機会になります。毎日手入れを怠らなければ、毛を洗う必要はないくらいです。洗うにしても、せいぜい月に一度で十分です。シャンプーをし過ぎると、被毛に含まれる天然の脂が失われます。入浴は必ず暖かい部屋で行ない、適温の湯とごくマイルドなシャンプー液を使います。ぬれた毛は、分厚い、吸水力のあるタオルでよく乾かしてやります。シャンプーで失われた脂肪分を補うために、ティーツリーのような天然成分のオイルをすり込んでおきます。

耳と爪の手入れ

毛の手入れをするついでに、耳と爪をチェックします。耳はウエットティッシュとイヤークリーナー液できれいにします。愛犬がしょっちゅう頭を振ったり、耳の内側に炎症を起こしていれば、感染症が疑われるので獣医に相談します。運動により、特に固い表面を走ったりすると、犬の爪は自然に擦り減るのが普通です。しかし、老犬は運動量が少ないので、爪が伸びやすいのです。一度にほんの少しずつ切るのがコツです。爪が白いと、ピンクの爪肉部分がよく見えますが、黒ずんでいると見分けにくいものです。爪を横に切ると痛いし、割れる危険があるので、鉛筆を削るように、斜めに少しずつ切ります。プロのトリマーにやり方を教えてもらおうと良いでしょう。

不妊手術

避妊処置はできるだけ若い時にさせるのが望ましい。手術をすると、老年期に悪性腫瘍（乳ガン／子宮ガン）や子宮蓄膿症にかかりにくいし、或は、その心配をなくすることができます。あなたの犬があまりにも高齢だったり、治療により不安定であれば別ですが、そうでなければ、老年期に不妊手術を受けさせるのも無意味なことではありません。（子宮に膿瘍ができる）子宮蓄膿症にかかった犬が生命の危機に瀕して緊急手術を受けるのに比べれば、健康な老犬に不妊措置をする方が簡単です。手術をしても安全かどうかの決定は、獣医の念入りな診断を待って、下すべきでしょう。手術をする場合、麻酔が効いている間に、歯石の除去とか、爪切りなどを獣医に頼むこともできます。

栄養——食餌と飲み物

事情が許す限り最上の食べ物を与えましょう。たとえ食費が高くついても、愛犬を健康に保つことで、獣医に支払う医療費を節約することができるのですから。犬の運動量に応じて食餌を加減します。肥満にしないように。1日1回、大量に食べさせるのではなく、少しずつ、2〜3回に分けて与えます。その方が、食事時がつがつすることなく、1日を通じて効率よくカロリーを燃焼できるのです。食べ物は室温にして与え、ビスケットが固すぎる犬には、湯か（塩の入らない）スープに30分浸して柔らかくします。

水は犬にとって最良の飲み物です。あなたの老犬が起き上がった、歩き回るのが困難であれば、いくつかの容器に水を入れてあちこちに置きます。脱水症に陥ると危険なので、ちゃんと水を飲んでいないか注意します。

若い犬であれば、床に置いた皿から飲んだり食

べたりすることに何の問題もありませんが、老犬は、身をかかめて飲んだり食べたりするのが困難かもしれません。ペット用品の販売カタログに見られるような食台を使うと、（あるいは、プラスチックのゴミ箱を逆さまにし、底に穴をあけて自分でも作れますが、）皿を食べやすい高さに置くことができます。

日課

一般的に、犬は、決まった日課、「いつも同じである」ことを好むものですが、老犬になれば、なおさらです。従って、身の環境と日課を変えないようにしましょう。例えば、食器と水入れはいつも定位置に置き、食事も散歩も毎日決まった時間にするように心がけます。

老犬に必要な配慮

高齢犬は、気温の変化にとりわけ敏感です。寒い時にはセーター、雨の日はレインコートが必要でしょう。老犬はすべて家の中に入れるべき



です。特に、夜間は、すきま風の当たらない所に分厚いマットと暖かい毛布を敷いて寝かせます。ホットカーベットに毛布を数枚のせれば日本の冬の寒さに適しています。蒸し暑い夏は、涼しい所、クーラーのついた部屋を選ぶことです。

年寄りの犬は節々が固くなり、関節炎を患うものも多いので、立ち上がったり、歩き出すのに時間がかかります。木の床など表面が滑りやすいと、足を踏ん張るのに支障をきたします。通り道に滑り止めテープを張ったり、裏がゴム張りの細長いマットを敷くなどの対策を考えます。肉趾の間の毛が伸びていると、表面がつるつるの所で滑る原因になるため、常時手入れをします。

階段も問題です。滑り止め加工をした木の傾斜面を作ってあげるといいでしょう。階段の場合、これまでは楽々と上がっていても、年を取ると、滑ったり、転落したりする危険性が高くなります。各段に滑り止めマットを貼り付けるか、下に小さなゲートを取り付けて階上に行けないようにします。それとも……あなたも実行なさいませんか——階段を上がれなくなった老犬セムのために私がしたことを。そう、あなた自身のベッドを階下に移すのです。

老犬は、最後には自力で歩けなくなるかも知れません。その場合は、トイレのために抱きかかえて外に連れ出したり、スリング（三角巾など）でお尻を吊り上げて散歩させる必要があります。

一歩も歩けなくなってしまったら、排泄物を吸収できるペットシートかタオルの上に寝かせ、

汚れたらすぐに取り替えてあげます。

旅立たせる日、安楽死の決断

犬の寿命は人間よりも短いので、愛犬が老齢になると、飼い主は、遠からず必ず訪れるであろう離別の時を覚悟します。誰もが願うのは、ペットが「自然死」で、しかも、安らかに、苦しむことなく息を引取ることです。しかし、獣医療の進歩のお陰で、動物が「自然の摂理」以上に長生きするようになり、寿命が伸びた分だけ、ひどい衰弱や苦痛、病気を進行させる可能性も増えています。犬は、自らの生命を保持しようとする本能に忠実なため、禁欲的な動物です。痛みや苦しみを我慢しようとします。ですから、犬が実際に苦痛を外に表わす時には、事態はきわめて深刻であり、想像もつかないほど苦しいはずです。痛みにも喘ぐペットを助けることができないのであれば、その苦痛と生命を長引かせることが、果たして、情け深い、人道にかなった、愛情ある行為なのでしょうか。首をかしげざるを得ません。

飼い主は、愛犬の「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」を保証しようと最期まで必死で努力をします。ありとあらゆる手立てを尽くし、獣医師にもできる限りの治療を頼むものです。しかし、回復の見込みがなく、苦しむ動物を目前にしながら、もはや、これ以上何もできない状況であれば、その時こそ、苦痛から解放してあげるべく、安楽死を決断する時です。

安楽死は、基本的には、通常の量を超える麻酔薬を、獣医の手で肢の静脈に注入するものです。処置そのものは、一般の手術と同様ですが、ひとつだけ違うのは、眠りに落ちた犬が再び目覚めることはないという点です。飼い主の中には、措置が行なわれている間、愛犬の体を抱いて、その死を見届けるに忍びないという方もいます。もちろん、その場に立ち会うかどうかを決めるのは、まったく個人的な問題です。私自身は、これまでに何度も現場に立ち会ってきました。動物をしっかりと抱いて、針が静脈に刺し込まれる間、やさしく体をなでてやり、やがて、私の腕の中でぐったりと力が抜けていくのを感じるのです。その死を見届けるのは、飼い主たる者が愛するペットに示せる最後の愛情であると私は考えます。

愛犬を安楽死させる決断をした人は、一定期間その死を悲しんだ後、また別の犬を飼いたいと思いはじめると言われます。一方、飼い犬が長期間苦しんだ挙句に悶死死めを目撃した人は、あの悪夢のような経験はもう真っ平、二度と犬を飼いたくないと考えるそうです。

ある飼い主は次のように述べています：「愛情は、時には、「手放すこと」です。あの「最悪の日々」よりもはるかに多い「幸福な日々」を共に過ごしてきたではありませんか。苦しみに終止符を打ってあげるのは、愛を示す最後の証です。あなたは、これまで、あの子の生涯に無条件の愛を注いできました。今こそ、あなたの力と愛が求められているのです。あなたは、愛犬を「この世という生」から立派に旅立たせることができるのです。「死もまた生の一部」ではないでしょうか」と。